

町制施行 60 周年特集 NO.3

優雅で温和な画風で知られる

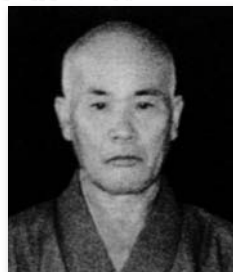
栗田 真秀



真秀は、1871年、繩生に生まれました。幼少より絵に親しみ、土佐派の絵師であった桑名の帆山唯念（画号、花乃舎）に入門し、唯念没後は名古屋の木村金秋に師事、その後京都で活躍しました。真秀の画風は、優雅かつ温和で、自然を題材にしたものや歴史や物語を題材にした絵を好んで描きました。

京都画壇の画法を学んだ

水谷 立仙



立仙は、1882年、小向に生まれました。萬古焼の下絵書き職人として働いた後、円山四条派で京都画壇の重鎮、竹内栖鳳の門人となりました。後の画号である尚仙は栖鳳より受けたものです。立仙の画風は、京都画壇の作風に影響を受け、花鳥山水を主なモチーフにし、繊細な描写を使い写実的な技法で描かれています。

今日は朝日史上の人物
を紹介します!!



「アーミン」

独自の学説を唱えた国学者

橘 守部

守部は、1781年、小向に生まれました。17歳のとき、一家離散のため江戸に下り、20歳を過ぎてから学問を志すという、当時としては晩学でした。29歳のとき、武蔵国葛飾郡内国府間村（埼玉県幸手市）へ転居し、49歳のときには、江戸深川に移り住みます。当時、主流であった本居宣長の学説を批判し、独自の学説を展開しました。「稜威道別」「稜威言別」など多数の著作があり、その業績は、香川景樹、平田篤胤、伴信友とともに「天保の国学四大家」の一人に数えられています。

萬古焼中興の祖

森 有節



有節は、1808年、桑名に生まれました。萬古焼は現在、四日市の地場産業として有名ですが、その発祥は桑名の豪商沼波弄山が小向の名谷に窯を開いたことにさかのぼります。弄山没後、萬古焼は一時途絶えてしまいましたが、有節は弟の千秋とともに小向の名谷に窯を開き、萬古焼を再興しました。有節は、当初古萬古写しの赤絵や楽焼・志野・織部などの写し物を製作していたとされていますが、しだいに独自の作風を作り上げていきました。急須の成形に特殊な木型を使用し、量産できるようになり、また、鮮やかな桜色の釉薬（腥臍脂釉）の開発にも成功しました。これらの業績により、有節は「萬古焼中興の祖」とされています。